

# 歴史を歩く 外岡秀俊

客家建築 (中国)

(編集委員)

中国南部にある客家の伝統家屋が世界から注目されている。地元に住み込み、異文化を掘り下げる2人の日本の若者がいる。

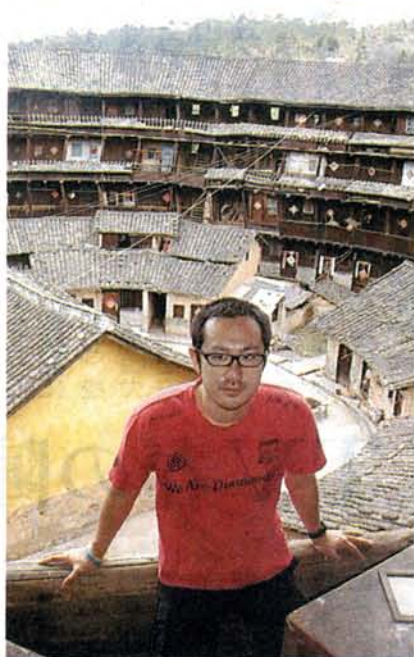
「ここが私の住まいです」

小林宏至さん(28)について門をくぐると、円筒形の建物の内部に巨大な空間が広がっていた。内周は4階建ての木造家屋で埋まり、木組みのコロシアムの趣だ。

「かつて60近い世帯、400人ほどの人々が、この土楼で共同生活を送っていました」

福建省永定県の湖坑鎮。首都大で学ぶ小林さんが文化人類学の博士論文を書くため、客家の土楼「環興楼」に住み着いて1年が過ぎた。

住居は縦割りで各戸に区分さ



土楼に住む小林宏至さん＝福建省永定

客家 中国では人口の9割以上

を占める漢族の中の一郡グループとされているが、独自の言語や慣習を持つ。中原と呼ばれた古代王朝の中心地(黄河中流周辺地域)から、戦乱に追われて南方に移ったと伝えら

れ、主に広東、福建、江西省の境界の山岳地に住んだ。香港、台湾、東南アジアへの移住が多く、それぞれの地で政治家や企業家が輩出。客家の世界大会も定期的に開かれる。房学嘉氏によると人口は4、5千万人。

れ、1階が台所、2階が倉庫、3、4階が居室だ。環興楼は約4

50年前に建てられた。土をつき固めた壁の厚さが1mあり、窓は少ない。だが内部に井戸や穀倉があり、小さな町のような。

小林さんは月7000元(約9200円)の家賃で4階の1室に住み、地域に数千棟ある土楼を調べている。大きな土楼は直径1000

mに近い。1960年代、衛星写真を見た米当局がミサイル発射基地と疑った、と地元で伝えられる。「夜8時に門が閉まるので、夜明けまで自分と向き合うだけで

## 伝統家屋「住んで、知る」

す。円周に区切られた星空がきれいで、自分だけのプラネタリウムを楽しんでいます」

村を歩くと住民らが「シャオリン、シャオリン」と中国音で小林さん呼び、話しかけてくる。「自分が観察するより、村の人たちに自分が観察されていた。地元で浴け込み、これからようやく研究ができます」

環興楼は若い世代が次々に出て行き、数世帯が残るだけだ。それでも旧正月には土楼を離れた人々が集まり、盛大に祝う。

福建省の土楼群は2008年、ユネスコの世界遺産に登録された。1階を土産店に改装し、名産のお茶や絵はがきを売る土楼も多い。地元では巨大な観光センター

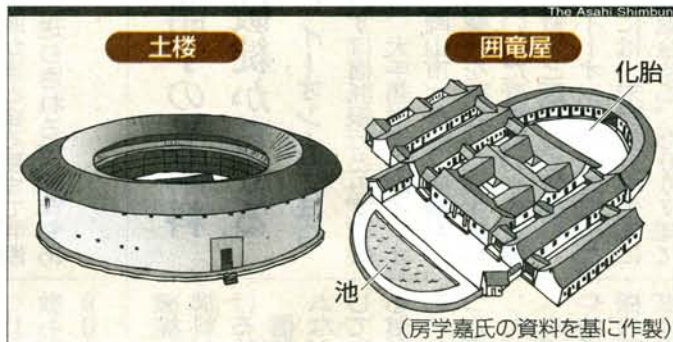
が造られている。永定県の頼曉東・文物局長は「2、3年以内に高速道路が整備され、観光客はもっと増える。土地の素材だけを使う環境にやさしい建築としても貴重だ」。

04年から土楼通いを始めた小林さんは、激変に戸惑いを隠さな

い。「一種の土楼バブルでしょう。慣習や伝統が、すたれなければよいのですが」

隣の広東省にも客家の伝統家屋が広がる。梅州市で、小林さんの先輩である河合尚尚さん(32)が地元の嘉応大学客家研究院の准教授として調査を進めてきた。

こちらの集合住宅は「囲竜屋」と呼ばれる。前方に半月形の池、後方に半円の「化胎」という隆起がある。山の「氣」が、龍を象徴する化胎から、中心部の広間にまつる祖先の位牌を通じて池に向かう。風水思想を体現している。「本格的な客家研究は始まった



(房学嘉氏の資料を基に作製)

ばかり」と河合さんは言う。1930年代に羅香林という学者が研究の基礎を築いたが、その後、中国では80年代まで停滞した。「漢族は一つ」という建前を崩しかねないと当局は警戒した。

改革開放に転じて以降、ようやく研究が認められ、91年に上海で国際学会が開かれた。客家出身の華僑が開発の遅れた故郷に投資したことも、流れを加速した。梅州市も昨年、2万近くある围竜屋を世界遺産に申請する活動を始めた。

風水や先祖崇拜など、客家は中国古来の習慣や伝統を色濃く残す。河合さんがひかれたのも、その点だ。だが客家ブームのために「漢族の本流」という建前が前面に押し出され、研究の幅が狭められていないか、最近には気になる。

たとえば「客家は南方に移動した漢族がその一帯の民族と融合した」という「土著起源説」を学者が提起し、波紋を広げた。「中原から逃れた漢族」という定説を覆す考えだ。これに対し、「中原文化の継承者としての誇りを傷つけ、投資ブームに水を差す」との声が上がった。

河合さんが在籍する研究院の院長で、自身が客家でもある房学嘉さん(58)は、あくまで実証研究が必要だと強調する。

「この20年、人類学、歴史学、民俗学を駆使して実地調査を行い、ようやく実態が明らかになってきた。これからは客観的な研究の足場を提供していきたい」

◆これまでの記事はアスパラクラブに掲載しています。